

---

# 俺のリサちゃん！

PATACO

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺のリサちゃん！

### 【NZコード】

N8414A

### 【作者名】

PATACO

### 【あらすじ】

あの有名な人形「リサちゃん人形」と28歳のサラリーマンが繰り広げる、ドタバタ奮闘記！

## リサちゃん人形

「こんにちは。俺の名前は茨木雅樹です。28歳で、サラリーマンしています。

「パパあ？」

「ん？」

「パパ、ケー キ屋さんね～」

「お、おう」

4歳の娘、夏樹もいます。

「夏樹、今パパ忙しいでしょ。パソコンしてる時は邪魔しない約束でしょ？ママがケー キ屋さんしてあげるから」

麗しき妻、華夏美もいます。ちなみに26歳です。

「えーママがやるの？ママ料理下手じゃん」

「いいじゃないの！遊びなんだから！」

「リアリティに欠けるわっ！」

「どこでそんな言葉覚えたのよつ！」

「うわあママが怒ったあ！」

夏樹は走り去る。

「待てーーー食い逃げじゃーーー！」

いやいや、違う違う。

華夏美は娘を追いかける。…また下の階から苦情来るぜ…。

実は俺、最近までアメリカに行つてました。夏樹が1歳の頃から最近までずっと向こうにいたので、かなり久しぶりの日本を満喫している。

単身赴任中の俺が娘の成長を知るには、専らインターネットに限る。

俺のパソコンは、娘の写真でいっぱいだ。

だが、最近悩みがあります。

『なあー！雅樹よ！腹が減つたぞー！』

：娘の部屋に居座るアレだ。

俺が帰国して、娘の部屋に入ったある日のことだ。その日娘の部屋を開けると、奴はいたのだ。

娘は地面で絵を書いていた。その背後のベッドの枕の上に、奴がいた。奴は枕の上で薄ら笑いを浮かべて俺を見ていた。

『よお。お前が夏樹の父親か？』

：喋った。

俺は入りかけた娘の部屋から出た。

意味わからんねえよ。

深呼吸してもう一度ドアを開ける。

『無視すんじゃねえよ、ハゲ』

ハゲてね————！！

「パパ？」

娘が不思議そうな顔をして俺を見上げた。

「何だ、あの悪人面の人形は」

娘は振り返る。

「リサちゃん？」

「そりだ、あいつ……ああ？！」

人形はいつもの営業スマイルに戻っていた。

「昨日ト ザラスでママに買つてもらつたの」

「へ…へえ…」

娘はまた絵の方に向き直つて続きを再開した。すると人形はまた悪人面をして

『可愛い娘だな』

と言つてきた。

『あたしに向かつて悪人面とは何だ。あたしは全世界のアイドルだぜ？わかつてんのかよハゲ』

「ハゲてねーよ！」

「何言つてんのパパ」

娘はまた不思議そうな顔をして俺を見上げる。

「あ…いや…」

人形を見ると腹を抱えて笑つている。

…あのクソ女…！

俺の日本の温かい家庭は、音を立てて崩れていくのである…。

## 犬とリサ

昨日は夏樹と華夏美は出かけている。俺はひとりでのんびり…できるわけがない。

『なあ、雅樹よ』

「何ですか」

『夏樹の服の趣味、どう思う?』

ソファーに座る俺の目の前の机に、あぐらをかいているリサが言つ。「可愛いんじゃないですか」

『いやあ、あたしにはロリータの趣味はないんだよなあ』

『そうですか。じゃあそろそろ部屋に戻つてください』

『寂しいこと言つなよ。いいじゃねえか』

部屋に入ると開けろと喚き散らすので、仕方がない。

「俺と喋つて楽しい?」

『いや全然』

ガーン

人形に言われても若干ショック。

「なんで俺としか喋らないの?」

『おつ、ハゲてるわりにはいい質問するじゃねえか!』

『いや…だから俺ハゲてねーし…』

『あたしがお前としか話さないわけはだな』

無視かよ…

『夏樹を相手にすると、こんな言葉遣いすると夢を壊すしよお、幼稚園の友達をわんさか連れてこられていじりまわされるのがオチだろ?華夏美だと、これもまた近所のババアに知れ渡つていじりまわされるのがオチだろ。お前なら、オッサンが人形が喋るなんて他人

に言つたら、狂つたと思われるだらうから他言しねえだろ?』  
まあな。いい歳こいた俺がそんなこと言つたら頭が狂つたと思われるだらうな。

「それはそれは頭のよろしいことで」

『だろ?』

そう言うとロリータ女はニカツと笑つて見せた。白い歯が覗く。  
ブロンドのストレートヘアを腰まで伸ばし、愛らしげ目に整つた鼻、  
きれいな顔。長い手足、白い肌。幼い女の子が憧れる完璧な美人だ。  
「…もう少しおしとやかにはなれないだらうか…」

『ああ? ! 何か言つたか?』

「…いえ…別に…」

ゴスロリ女は大口を開けてあぐびをした。

…いつか絶対燃やしてやる。

ワン! !

俺の足元で茶色いダックスフントの蜜柑が吠えた。

『おつ! 犬!』

ロリータ女は机から身を乗り出して犬を見た。

『乗せろ! 犬!』

蜜柑は尻尾を振つてリサを見ている。リサは机から飛び降りて蜜柑  
の背中に飛び乗る。

『うほーい! !』

蜜柑は面白がつて走り出した。

『つきやーこりや最高だぜー犬!』

…これで暫くゆつくりできぬ…

俺ソファーに横になつて目を閉じた。

目が覚めた時、ロリータ女が顔に乗っていたわけだが……。

## 言いなり

『おー、今日はそつめんか～夏だねえ』  
リサは夏樹の膝の上から食卓を覗いている。

『なあ雅樹よ。頼みがあるんだけど』

俺はリサを無視して華夏美の手伝いを続ける。  
『無視か。いいんだな、あたしを無視するならここから飛び上がり  
て夏樹のアゴにカーンとぶつかってだな、夏樹は舌を噛んでうわあ  
うつてなことに…』

「わかった、聞くよ」

「あなた何言つてゐの?」

「いや…独り言」

リサを見ると、例の薄ら笑いでこっちを見ていた。

『あたし、めんつゆで汚れたくないわけ。だから夏樹にそれを伝え  
てくれよ』

「…夏樹、人形を部屋に置いてきなさい」

「なんで?」

「せつかくのお洋服が汚れたら可哀想だら」

「そうだね」

夏樹はリサを部屋へ置きに行つた。

ああ、静かな食卓だ…幸せだ…。

食事が終わると、夏樹と妻は風呂に向かつた。  
家族は愛しているが、いつもひとりになれる時間も大切だ。

『おーい！夏樹たちが上がつたらあたしも風呂に入れてくれー！』

…俺に安らげる時間はない…。

俺は夏樹の部屋を開けた。人形は当たり前のよう枕の上であぐらをかいこちらを見ている。

「なんで俺に頼む？」

『さつき言いそびれたんだよ』

「人形なんだし、別に明日夏樹と入ればいいじゃないか」

『今日夏樹にカスターつけられたんだよ、頭に』

「だから？」

『明日まで待てん』

「待てよ」

『…いいんだな、夏樹が眠つた後、絶えずほっぺをつづいて安眠妨害をだな…』

「やります。洗わせていただきます」

「あれー？パパあたしの部屋で何してんの？」  
夏樹が部屋に入ってきた。

「ちょっとな…」

「ふーん。あ、お風呂パパの番だよ

「はいはい」

俺はリサを持つて部屋を出る。

「リサちゃんどこに連れて行くの？」

ドアを閉めようとする俺に夏樹が聞いた。

「風呂だよ。夏樹、この人形汚れてるぞ？」

「あ、リサちゃんの上にシュークリーム落としたんだった  
そりゃ汚れるわな。

「トリートメントもしてあげてね、パパ」

「あー…はいはい

「リサちゃんと行ってらっしゃーい

俺は夏樹の部屋を後にする。

風呂へ向かう途中で華夏美にすれ違う。

「あら、あなたリサちゃんとお風呂？…ふつ

今…今笑つたぞうちの嫁は…！

「夏樹がカスターつけてるんだよ、頭に」

「あら、ほんと。よく気づいたわね」

華夏美は人形を見て言った。

「まあな…」

まあな…としか言えねえ。人形に聞いただなんて言えねえ…！

## 新たなる地獄への序章

俺はそのブロンドの髪をかき上げ、首もとから腰にかけて締めるマジックテープを外す。服をすり下ろすとしなやかな身体が現れる。白い肌、細い腰……って待て。官能小説かよバカ野郎。言つておくけど、俺、人形に性欲感じるタイプじゃねえから！

『……やらしいこと考えてんじゃねえだろ？』

「馬鹿かコノ野郎」

『あつはつはつ。あたしのナイスバディにムラムラしてゐるへせに』

「燃やすぞ」

『ハツ。娘の悲しむ顔が見たいのかよ』

手の中のクソ人形は鼻で笑っている。

俺は苛立つてそいつを湯船に投げ込む。

『何するんだよ！投げんな！』

「つるせえ」

人形は湯船の縁に掴まってこっちを睨んだ。

俺もシャワーで軽く体を流して湯船に浸かる。

「はあ～っ

気持ちよさに溜め息が漏れる。

『気持ちいいなあ。これぞ極楽』

「お前はオッサンか」

暫く湯に浸かっていると、リサが湯船から出た（と言つた）、湯船の縁から飛び降りた）。そして俺に洗面器に湯を入れると命令し、その湯で体を洗い始めた。俺はその様子をぼーっと眺めていた。俺、人形と風呂に入ってるぜ……？

その後俺たち（俺たち？）は風呂から出てリビングへ戻った。

「リサちゃんきれいになつたあ？」

「ああ

自分で自分の頭洗つてましたよ…。

「じゃ、あたしがドライヤーしてあげる」

夏樹は俺の手から裸のままのリサを取った。するとリサが叫んだ。

『雅樹！ダメだ！止めてくれ！』ドライヤーはダメだ…髪が縮れるう

！』

…ぶつ！（笑）

俺は笑いを堪えながら、夏樹にやめるよつて言つた。

ドライヤーの熱で縮れたりサの髪も見たかつたよつて思つ。ふふふ。

俺がリビングで風呂上がりのビールを飲んでいると、夏樹が部屋から出てきた。手にはピンクのネグリジェを着せられて不機嫌そなリサが握られている。俺はまた笑いを堪えるのに必死だった。

まあ、何ともあれ今日も1日が終わる。

…俺、死んでもまづわマジで…。

このままじゃ俺はいい年こいた人形オタクだ。アキバだ。…地獄だ。どうする…燃やすか…？いや、そうすれば夏樹が泣く…ああ、俺はどうすればいいんだ…！

その時悪魔の囁きが聞こえてきたのだ。

『なあ、雅樹よ。今度の日曜日夏樹と一緒にトイザス連れて行つてくれよな』

…ああ神様あ  
！！

## 家族、増える

ああ…

23時58分

二三時五十分

0時00分

ああーーーついに日曜日になつちまつたぜ！

俺は今日、悪魔と夏樹をトイ  
ラスに連れて行かなければならぬ

もうほんと人形恐怖症だぜ俺！

： 眠れねえし！！

「あなたあ～」はんよ～：起きて～

リビングから妻の声が聞こえる。麗しき妻の声も、今じゃ悪夢だ。お願いだから今日は起きてないでくれ。寝室から出さないでくれ……。

ばふつ！

100

「パパあ」

「夏樹・重い・」

夏樹が俺の上にのしかかってきた。俺はイヤイヤ目を開けた。お腹の上に夏樹が乗っかっている。ああ、今日ばかりはこの可愛い娘も

小悪魔だ。

『やあ。おはよう雅樹くん』

二〇四

俺は冷や汗を浮かべながら左に首をひねる。

『經言』

ああー！・！・！

俺は夏樹を抱えて寝室を出た。

「あいつはまだ眠いんだよねー。」

「そうなの！」

「いただきます！」

俺は熱いコーヒーをグビグビ飲みこんだ。

朝食を食べていると夏樹が横から話しかけてきた。

「ああああ」

わかっているさ……わかっているとも。

俺たちは昼食を済ましてから車でオモチャ屋へ出かけた。

なあ夏樹、なんでオモチヤ屋に行きたいの？何が欲しい？」

口リー タ女が握られている。

「ママがね、リサちゃんの服とお友達買つていいよって言ったの」  
「そうだろうな。わかつていたさ。

「お願ひだから大人しそうな子を買つてくれよな

「ん？」

俺は娘にはわけのかわらないことを口走っていた。信号待ちで後ろ  
を見ると、あの悪魔がニヤニヤしていた。

俺は呪われているんだ。絶対そうだ。

俺は夏樹と手を繋いでオモチャ屋に入店した。ヤバイ…背中に冷や  
汗が。

そして遂に地獄へ。リサちゃん人形コーナーだ。夏樹は俺の手を離  
して早速洋服コーナーへ走った。輝く瞳できらびやかな洋服を見て  
いる。

俺は周りを見回してみた。リサによく似た色々なタイプの人形が並  
んでいる。寒気がするぜ。

「パパ、これがいい

夏樹が足元で俺を見上げていた。手にはメイド服が握られている。  
俺は笑いがこみ上げてきた。リサ、メイドなんてガラじやねえし！  
本人も嫌がるだろう。本人は特攻服とかが欲しいだろうに。  
「でね、お友達はこれね

来た。来たぞこの瞬間が。俺は恐る恐る人形の顔を見る。

「…いいんじゃない？ 可愛いじゃないか」

人形は、ブルーのセミロングヘアで、毛先が外側にカールしている。  
顔はリサ（営業スマイルの時）より大人しそうな顔つきで、右に涙  
ホクホクもある。リサよりもいい子そうだ。いや、あれより性格の悪  
い奴なんていねえだろう。

「だよね！ 可愛いよね！ 決まり！」

俺たちはそれから華夏美に頼まれた買い物なども済ませて買つて家  
に帰つた。

## マリン登場

新しい人形を買って来た口は夏樹は疲れて晩御飯も食べずに寝てしまい、結局そのまま、まだ人形は箱の中のままだ。

ところが、いよいよ今日開けるらしい。しかもたまたま俺は仕事が休み。ドキドキの一瞬です。また悪魔か…はたまた…？

「パパあ～見て」

夏樹が部屋から人形を連れてくる。右手には新しい人形。左手にはブロンドのロングヘア（悪魔）。俺はもう…胃が痛え。

「マリンちゃんなの」

髪の毛が青いからマリンか？そのままだなあオイ。

「へ～そうか」

「うん！」

夏樹は嬉しそうに笑つて、リビングで遊び始めた。可愛い娘の手には、美女がふたり（片方は悪魔です）。俺は新聞を読み始めた。

ピンポーン！

玄関のインター ホンが鳴る。夏樹がインター ホンの受話器を取る。

「は～い。誰え？」

「あたし～」

「あ～！」

どうやら夏樹の友達らしい。

「パパ、あたし遊んでくるから～」

娘は玄関へと走つて行く。

「短い針が？」

「5～！」

「行つてらっしゃい」

娘に門限を確認させると、俺は娘を見送った。

『さて。華夏美は隣の奥さんとパーティのバーゲンだ。床には2体の美女。この状況からするともちろん…』

『ふう。遊びに行つたぜ～』  
喋りますよね。そうですよね。

『…どうも、はじめまして』

マリンが俺とリサに挨拶をした。リサと違つて、寧に正座だ。なんて礼儀正しいんだあ！！

『まあ、そう固くなるなつて～！くつろげ！』

お前はくつろぐな。

『でも…あたし、人と喋るの初めてだし…』

『気に入んなよ。こいつはバカだしハゲてるし、ただの人形オタクだぜ？あははは～』

殺す…絶対燃やす…。

『失礼ですよ！ハゲてないじゃないですか！』

嗚呼、なんていい子なんだああ！

『…バカで人形オタクかどうかは知りませんけど…』

いや、いやいやいや…そこも否定してよ…。

『あ、そうだ。みかん！』

リサが蜜柑を呼ぶと、蜜柑が元気よく走つてきた。

『こいつ、背中に乗せてくれるし、あたしたちをオモチャにもしね

えし、いい奴だぜ〜』

『…犬』

あれ？マリンの表情が…？

『どうした？マリン』

『犬うううう！…』

マリンは突然立ち上がりて蜜柑にしがみついた。蜜柑は若干びびつて固まっている。

『犬ー犬ー！よ～しょしょしー！よ～しょしょしー！可愛いなあー！』

…ムツゴ ウさんだ！

『この毛並みがたまりませんなあ！いやーこの瞳も最高ですなあー！』

また変なキャラが増えたー！

## 小悪魔マリンの提案

『ねえ、どうして雅樹さんとしか喋っちゃいけないの?』

『それはだな、話すと長くなるんだよ。まあ手短に話せば、要は雅樹が人形オタクだからだな。うん』

『へ~』

いや、違うから…。

ある休日、妻と娘が揃って外出している時に、ふたりがそんな話をしていた。

俺はリビングの机の上でノートパソコンを広げて資料をまとめていた。その机の上でふたりが話しているのである。否応無しにチラチラふたりが視界に入るのだ…。

『おい、何してるんだ?』

「仕事

『大変ですね』

「まあね」

『それにしてもお前眼鏡似合つな、別に知的キャララジやねえのにー!あはははー』

うつせえよ悪魔。

あ、ちなみに俺、新聞読む時とか仕事中は眼鏡かけてます。

『会社つて、やっぱり大変か?』

『そりゃあ多少はね』

『セクハラ上司のいじめとかお同様の嫌味とかですか…?』

『…いや、俺一応男だし…そういうのって女社員の悩みだろ普通マリン…お前結構アホだろ…』

『それでも暇だなあ~』

『じゃあ寝てろよ。うつとうしこし』

『うつせえよハゲ！眼鏡！』

「ハゲてねえし！しかも眼鏡つて悪口じやねえしー。」

『あ…あたし、いいことを思いつきました！』

『何？』

何か嫌な予感が…

『雅樹さんの会社を見学しましょーう。』

ほら…そんなことだらりと思つてたよ…

『いいなあそれ！』

『却下』

『なんでだよ！…』

「俺、人形オタクつて思われたくねえんだよ

『今更じゃねえか！』

いやいや…。

「俺、女子社員にモテないわけでもないし、大事な仲間やクライアントだつていっぱいいるんだよ。だから人形オタクとか思われたくないんだよ。わかった？」

『…わからんな』

クソ女め…！

「第一、お前たちを会社に連れて行つたとして、夏樹はどうする？寝る時までお前らと一緒に、寂しがるだろ。泣くぞ？」

『じゃあ体は家に置いといて、頭だけ連れていけよ』

『余計泣くわアホ！』

『じゃあどうするんだよ～』

『だから会社に来なけりゃいいだらうー。』

『イヤ』

『黙りなさい』

『イヤだね』

『言つてろ』

『イヤだ〜イヤだ〜』

『あ〜うるさい！』

俺とリサは子供の口喧嘩レベルの言い合いをしていた。すると突然マリンが割つて入った。

『仕方ないじゃないのー！リサさん、諦めましょうー！』

『だつて暇じやねえかー！』

『あたしが遊んであげますー！』

女神だ！マリンよー！

こうして危うく人形を連れて行く危機から逃れた……はずだった。

## 桃色にひびく

「じゃ、行つてくるね。8時には帰るから」

「あなた、今日の晩御飯は何がいい?」

「何でもいいよ。夏樹は?」

「あたしはオムライスう~」

「うづつ…また難しいものを…」

「え~っ。いいじやん!卵ぐら~いキレイに巻いてねママ」

俺は愛する家族の微笑ましいやりとりを見て、家を出た。

「おはよ~」

会社に着くと、同僚の佐藤が俺に行つた。

「おはよう

彼は有名大学卒業のエリート社員だが、そういう雰囲気を全然感じさせない氣さくでいい奴だ。みんなからも圧倒的な支持がある。俺の会社は出版社だ。海外にも支部があるデカい会社だ。

「あ、そうだ茨木。部長が探してたよ

「ありがとう」

俺はそう言われて部長のところへ行く。

「よ~..」

「おはようござります、部長」

部長…肩書きは堅苦しいが、うちの部長は…スキンヘッドにサングラス、アロハをこよなく愛する男だ。何故部長になれたのか…謎だ。

「君に担当してほしい作家がいたりするんだよん。もちろん引き受けてくれるよねん?」

部長…甘えないで下さい。

「そのアロハ、最高ですね」

「わかる? ニュー・モデルなんだよな。今年のトレンドはな、大き

めの花のアクセントで…」

部長は嬉しそうにアロハの説明を始める。チャンス！

「やうですか。では私は仕事に戻りますので」

「はいはい」

やつた！俺は回れ右をする。

「…いやいや待て待て！話まだ終わってねえじゃんか！」

…あ～あ…失敗した。

「君に新しく担当してほしい作家さんはな、女性作家でな、桃色いちごさんというんだ」

…すげー作家名だな。

「なんで私に？」

「なんとなくわ～一しつかり者の君と変な名前の作家とか、おもしろいじゃないか～！あはははは～」

このクソ部長…！

「じや、この住所に14時に頼むね」

俺は部長からメモを受け取った。

「ショッキングピンクの外壁の家～から、わざとすぐわかるさ」  
うわー…。

## ピンポーン

14時に桃色いちごを訪ねた。一度も迷うことになかった。本当に外壁がショッキングピンクだったから。屋根やドアや窓枠は真っ赤。派手すぎるだろ。しかも表札にMOMOIROって…アホだろこの作家。

「はい」

インターほんに若い女が出る。

「出版社の茨木です」

「ああ！雅樹ちゃんね？聞いてるわ。今開けるわね～」  
うわーなんか会いたくね～。

俺はロックが解除された門から中に入る。小さな庭にはバラがいっぱいだ。もう俺絶対この作家と合わないの田に見えてるつて。

「雅樹ちゃん勝手に入つて~」

家の中からいちごがそう言った。俺は勝手に玄関に入り靴を脱いだ。家の中は白と金を基調としたオリエンタルなインテリアだ。家は大きいわけじゃないけど金持ちか?

「いらっしゃーい。こっちょ

俺は声がする方へ向かう。そして絶句。

「こんにちは、雅樹ちゃん」

「……こんにちは」

原稿やら資料やらで雑然とした部屋に、腰までのストレートな黒髪のロリータ女がいた。そして極めつけは…その部屋にはたくさんの人形…。

「よろしくねっ」

俺、卒倒しそうだよ…

## ここ「のじ」の花園

「雅樹ちゃん顔色が悪いわね。お紅茶でも淹れましょうか?」

「いえ…お構いなく」

「あつそつ。せっかく私のスペシャルブレンドのHクセレンントライーを淹れて差し上げようかと思つたのに」

「何だよそれ!」

「あの…」人形は

「私ね、リサちゃん人形大好きなのよ。リサちゃんでしょ、マリンちゃんでしょ、アヤカちゃんでしょ、それからマロンちゃんに…」

「失礼ですが、おいくつなんですか?」

「俺は頭の痛くなるいじごの言葉を遮つて、訊いてみた。

「あら、雅樹ちゃん私に興味があるの?」

「そういうわけじゃないけど…

「ええ、まあ」

「いくつに見える?」

「マジでわかんねえよロリータ女。

「わかりません…」

「ふふふつ。16才」

「えー!」

「若っ!」

「…」両親は  
「15の時から小説を書いてるの」

「いないわ。私は小さい頃イギリスの孤児院について、たまたま観光に来たここに住んでた老人夫婦の養子になつたの。ふたりとも一昨年と去年にそれぞれ亡くなつたけどね」  
なんかすげえ人生だな…。

「では、この家などはその夫妻の趣味で?」「いいえ、死後に私が塗り替えました」

うわー…。

「ねえ、私の小説を読んだ?」

「いいえ、まだ…。今日突然担当を発表されまして」

「ふうん。また読んでみてね。いっぱいベストセラーになってるから」

「そうなんだ…知らなかつた。物書き歴1年で…すごいな。

「最近までアメリカに赴任していたので知りませんでした」

「へ~」

「今日帰りに本屋へ立ち寄つてみます」

「買ってね」

「はい」

そう言つと少女は純粋なあどけない笑顔を見せた。なかなか可愛いじゃねえか。

「あ、そうだ。雅樹ちゃん、敬語は使わないで。堅苦しいのはイヤだから」

「あ…うん」

「つてか雅樹ちゃん、なんで前の担当ちゃんが辞めたか知つてる?」

「いや…」

そう言えばそうだ…

「ふふふ…っ」

えー…聞きたくないかも…。

「私の美貌にストレスを感じたからよー才ホホホ

何じやそりや…

「ベストセラー作家でブログ女王の私が眩しそうたんですって。」

「へー、ブログ女王なんだこの人…」

その後、俺は用件を済まし、帰宅の路についた。血色の最寄り駅で本屋に立ち寄った。

「え~っと……桃色いちご」…

俺は作家名を田で迫る。すると発見。

『ロリータ物語』

『ベネチアの薔薇』

『桃色両想い』

『長靴を履いた苺』

…すみません、どれも読みたくありません。でもとりあえず一冊手に取つてみる。

『ベネチアの薔薇』

適当にページを開けてみる。

『…マリー・アントワネットは、自分の団子鼻がコンプレックスであつた。そこへ現れたのは、同じく団子鼻のフォルゼン伯爵。ふたりは深く愛し合つていた…』

…ふーん…。

また適当なページを開けてみる。

『…その時、アンドラが敵陣に撃たれた。

「アンドラー！」

「オスカラ！どこだー！」

「アンドラ…見えていないのか…なぜ…」

「…オスカラ…」

アンドラはオスカラへ手を伸ばした。

「アンドラ…逝くな…私を置いて逝くな…！」

「オスカラ…愛している…」

「アンドラ…」

アンドラは田が見えていない為か、オスカラに向かつて手を漂わせる。

「アンドラ…見えていないのか…なぜ…なぜ戦場で田隠しプレイを…？」

『

…アホだろ。

俺は無言のまま小説を本棚に戻した。

今度は帰つてパソコンを立ち上げてみた。

『桃色いち』

検索してみると、するとすぐにブログが見つかった。クリックしてみる。

『今日は新しい担当さんが来ました。名前はMASAKIちゃん。出版社の人つてむさ苦しい人だと思つてたら、若くて男前でびっくりしちゃつた。エヘン』

何故かインター ホンを押している俺の顔写真が載つてゐる。…あのクソ女…インター ホンの中に隠しカメラを…！！

俺、日本に帰つて来ちゃいけなかつたのかな…。

47位--!（前書き）

皆様、本当にありがとうございます！

47位！！

『オイ！ハゲ！聞け！聞くんだ！！』

俺は鼻の穴に腕をつつこまれて目を覚ました。俺は休みで、リビングのソファーでうたた寝していたところだった。ちなみに妻と娘はまたしても外出中。

「…オイ、鼻の穴はねえだらうよ」

『細かいことは気にはんなやハゲ！』

「だくから…俺ハゲてねえの…」

『雅樹さん、大変なんですよ…』

「ああ？」

マリンがソファーの前の机の上に座つて言つ。このふたり、食事をする机には自力で上がれないのだが、この応接の机になら協力して上がることができる。

「何が大変なの？」

『この小説、コメティイのランクインされたんですよ！』

「え？！」

『現在47位だ』

「マジで？」

『ああ、マジだ。お前の人形オタクも徐々に有名になつつあるぞ！』

いや…それはちょっと…ね…。

『ほら、雅樹よ。土下座して読者の皆様に礼を言え…』

土下座ですか？！

『リサさん、土下座はやつすすぎですか？』

『そうか？』

プルルルル…

「おっ、電話だ。…いや、ファックスのようだ。

「えへっと…あ、桃色いちごからだ」

『読者の皆様、桃色いちごです。この度『メティ』で47位にランクインされたんですって？私の美貌のお陰ねつ…これからもどんどんファンレター待ってるわね。愛を込めて。桃色いちご』

…だつてさ。

プルルルル…

おっ、今度は電話だ。

「もしもし、あなた？あたしよ」

華夏美だ。

「47位にランクインですって？凄いじゃないの！あたしのお陰ね！」

お前も自信過剰かよ！

「パパあ？」

電話が夏樹に替わられたらしい。

「ああ。パパだよ」

「47位って何？」

「…ああ…大人の事情だ」

「何よそれっ！パパのバカ！」

…だつて説明すんの面倒なんだもん…。

「あ、あなた？それじゃ、あたしたちもうすぐ帰るから」

「ああ、わかった」

…なんで俺以外のみんなはランギングとか知つてんの？

「ま、そういうことだからや、お前ら。そろそろ帰つてくるらしく

から夏樹の部屋に行つてろ

『はいよ

皆様、本当にありがとうございます。47位、嬉しいです。これからも頑張りますね。

「パパ～！」

「ただいま～」

あ、愛する家族が帰つて参りました。蜜柑も玄関に走つて行きました。

「パパ、見て！ジュリアよ！」

… ジュリア？

ああ… 今日はめでたいはずだったのに… また人形が増えた…。

## 魔女、来たる

「おはよう雅樹ちゃん。お紅茶はいかが?」

「…お構いなく」

俺はいちごのエクセレントティーを断つて、椅子を拝借した。「で、なんで俺呼んだの?」

「暇だったから」

「友達とか呼べばいいじゃん」

「学校行ってないから友達いないの。ってか人形が友達」

「あつそう…」

「そ、俺は今日、突然呼ばれてきたのである。」

「っていうか、俺ケイタイのアドレスとか番号とか教えた記憶がないんだけど?」

「…ふふふ。私にわからないことなどないわよ雅樹ちゃん」

「…。」

部長…俺ダメっす…。

「夏樹ちゃんと華夏美ちゃんは元気?」

「うん。今朝も田玉焼きを失敗して夏樹に笑われてたよ」

「華夏美ちゃん料理下手くそだもんねえ」

：待て。

「…なんで家族のことを?」

「しつこいわね雅樹ちゃん。私にわからないことなどないのよ?」

魔女だ！

「今度お宅にお邪魔してもいい?私のスペシャルブレンドの茶葉をお持ちしますわ」

「いや……来なくていいよ」

「なんで？」

「だって……キャラ的にうしろに溶け込むタイプっぽいもん……。

「そう言えば、夏樹ちゃんもりさちゃん人形を持つてるのよね？」  
「どこのまで我が家内の内情を知っているんだ……！」

「まあね……」

「最近新たに3体になつたとか」

魔女め……。

「話が合ひそうだなあ。しゃぶしゃぶとか用意して招待してみる

「そんな豪勢な晩御飯を他人の君になど……」

「雅樹ちゃん！」

「いちじ」と見ると田に涙を溜めている。

「うわわわわ！泣くなよ！」

「だつて……だつて……両親もいなくて……友達もいなくて……そんな私が  
鍋料理を囲むことなんて……できると思つ？そんな小さな願いすら叶  
わないなんて……ああ……」「……わかつたから」「決まりねつ！」

「数日後……」

「ただいま～」

俺はいつものよひに玄関のドアを開ける。

「おかえりパパ」

夏樹と蜜柑が玄関まで迎えに来た。俺はふたりの頭を撫でながら家  
に入る。台所では華夏美がエプロンをつけて俺に微笑みを向ける。  
なんて温かい家庭だろう。

「おかえり雅樹ちゃん！」

「…ただいま」

「どうしてコビングにいちごがいるのかな??

「パパあ

「ん?」

「あたし、いちごちゃん大好き!」

うわあ…あの魔女…娘に魔法かけたな…!!

「あなた、今日は豪華にしゃぶしゃぶよ」

お前もか華夏美ーー!!

「美味しいです、華夏美ちゃん!こんなに美味しいしゃぶしゃぶを食べたのは一人暮らしになつてから初めてです」「まー!」

「いちご」ダメだ。華夏美は料理を誉められると有頂天に…。

「いちご」ちゃん、今度は何が食べたい?」

「サーロインステーキかな!」

「任せろ!!」

あー…また来るんだね…いちごさん…。

腹も膨らんで、俺はソファーで新聞を読み、華夏美は後片付け、魔女と夏樹は床で蜜柑と遊んでいる。

「私も犬飼おうかな」

「でも一人暮らしでお世話大変じゃないの?」

「だよね~」

「うちに蜜柑がいるからまた遊びに来たらいいじゃん!」「だよね~!」

いやいや…エングル係数が上がるからもう来るなよ…。

「それにいちごちゃんにはたくさん人形がいるでしょ?」

「うん」

「今度遊びに行かせてね！」

「いいわよ」

うわあ…夏樹絶対あの家氣に入るぜ…

「あたしがもう使わなくなつた力チュー・シャとかリボンとかもあげるわよ。リサちゃんの服もいらないのあげるわ」「やつたあ！」

うちの娘を釣るなーー！」

「あたし、いちごちゃんみたいなお姉ちゃんが欲しかつたなあ

「私も、夏樹ちゃんみたいな娘が欲しかつたなあ

何じやそりや…！それを言つなら妹だろつ！」

## 俺を取り巻くロリータ女たち

華夏美は隣の奥さんとまたバーゲンに、夏樹は公園に…俺は奴らと家に…つうつ…。

『暇だな～マリン…』

『え？ そう？』

マリンは蜜柑を撫で回しながら言つた。

『お前は犬オタクだから暇じゃねえか』

『うん』

『ジュリアは暇だよなあ？』

『まあね。でもやつとボックスから解放されて、こいつやって普通に会話もできるだけでハッピーだな』

会話される俺は不幸せです。

『まあな。あの箱マジできつこみな。手足も首も針金で固定されるしな』

『うん』

ジュリアは、他のふたりと違つて西洋美人だ。背も一番高く、色白のふたりとは違い、小麦色の肌がかっこいい。髪はリサと同じブロンドだが、リサのストレートヘアとは対照的にパー・マがかかっている。そして口調にやたらとカタカナが多い。まあ…服装は予想できるでしょ？ 3人ともゴスロリなんだよね…。

『とこりうでビうしてあたしたちはミスター茨木としか話してはいけないの？』

『それはね、話すとすぐ長くなるんですってよ。要するに、雅樹さんが人形オタクだからなんだそりで』

マリン、それは奴のデマだぞ？

『へ～』

納得すんな！

ブイーン

おっ、携帯のバイブレーションだ。

もしもし?

羽林正傳

「あのね、助けて！」

「何？」

『新作のネタなんだけどね、どのがいいか自分で決められなくて、箇条書きにしたネタ候補をファックスで送るからちょっと見て!』

卷之三

「嘘のよ。俺には君の感性がわからんやーーー

『つべこべ言わずに協力しなさい！』じゃないと雅樹ちゃんの過去を  
ブログでバラすわ！』

：怖えええ！！

「わかつたよ。今から送つて」

『文選』

その後、A4用紙8枚に渡つて送られてきたファックスを見て、俺は咄然としている。

## ちょっと切ない話

「ねえ、ジュリアちゃん」

『呼び捨てでいいよハニー』

『…おい…』

リサとマリンは顔面蒼白でジュリアを睨む。

『夏樹と喋っちゃダメだろ？がボケエエ…！』

…はつ…！

俺は悪夢から目覚めた。隣には華夏美がスヤスヤと寝息を立てている。なんと縁起の悪い夢なんだよ…。俺は枕元の携帯電話をチェックする。現在の時刻は午前4時。3時にメールが1件届いていた。

『雅樹ちゃんおはよ～。いちごだよん。今日は締め切りの日だね。ばっかりでてるから10時に来てね～。あ、ついでに、人形ちゃん3人とも連れてきてねつ…！』

…いや、最後の一文…意味わかんねえ…。

「おはよ～。早起きどころかまだ夜だよ～？ところでなんで人形なんかいるの？」

返事はすぐについた。

『この前見た時に、何か不思議なモノを感じたのよね。ちょっと気になつてね。オホホ』

うわあ…マジで魔女だよこの人…。

俺はもう一眠りして、いつものように家族との朝の一時を過ぐ、「普通に出社。

さて、そろそろ悪の拠点「いちご城」へ行かなきゃいけない。もちろん、カバンの中には奴らが。

もう会社では大変だった。俺の会社を見たいからって出せ出せうるさいの何の…。まあ人形オタクだと思われたくなかつたから必死に隠し通したけどね…。

## ピンポーン

『あ、雅樹ちゃん。入つて入つて』

インター「ホン」の応対を聞いて俺は「いちご城」へ入場した。「いちご」と俺はひとつ通り業務的な話を済ませ、わけのわからん紅茶ではなく普通の緑茶を頂いた。

『私の本あんまり好きじゃないのね』

「うん。世代も違うしな。人には好き嫌いがあるから」

『そうね。でも新作はぜひ読んでね』

「題名は?」

『細木イチゴのズバリ言われちゃったわよ』

ダサつ！

『あ、そうそう。お人形は?』

「ああ…」

俺は鞄から3体を取り出し机に並べた。「いちご」は3体に遊び心いっぱい笑顔で話し掛ける。

『こんなにちは、桃色いちご』です

横たわったロリータ3体はもちろん無言。

『こんにちは、私、小説家やつてます』

相変わらず3体は営業スマイル。

『……わかつてるのよ、茶化すんじゃねえ。燃やしてしまうわよ?』

愛らしい笑顔のままそつ言われると、3体は突然素早く正座した。

『こんにちは!』

うわあ、リサが真面目だぜ!ってかこの女…魔女だ絶対!

『みんなそんなに固くならないで。足、崩してね。遠慮なくくつろいでよ』

『はい、ミス桃色』

ジユリアがそう言いながら長い脚を伸ばす。それをチラッと見てリサがあぐらをかく。マリンはいつも正座だから崩さないけど。

『私、幼い頃からずっと夢だった。こうやって人形とお話するの』

『そりなんですか?』

『うん。ここにいる人形は誰も喋らないから』

『まあな。大抵の奴は話さねえからな』

『どうして?』

いちじょがそう訊くと、3体はしばらく黙り込んだ。やがてリサが切り出した。

『あたしたち人形は、みんな人間の生まれ変わりなんだ。誰もが魂を持つてる。だが、人形に生まれ変わる奴は、みんな人生を諦めた奴なんだ。人間界に悩み、人間を辞めた奴。だから人間に関わろうとしねえ。たとえもし関わったとしても、歳を取らない人形はその人間を見送ることになる。そんなことなら、人形に徹して、人間に飽きられればリサイクル。その方が楽さ』

『……悲しいね……でもあなたたちは私や雅樹ちゃんと話すわ?』

『あたしたちは人間を諦めたわけじゃないからな』

リサがそう言いながら鼻で笑う。

『？』

『死者の数つて、物凄いでしょ。だからたまに間違えるんですよ、神様の秘書が。秘書が間違った書類を神様に提出、神様は気付かず印鑑をポン！それであたしたちはお人形です』

マリンもそう言いながらクスッと笑う。

『髪が伸びるドールとか、本当の人間のような顔立ちで長年人々を魅了するドールとか、そういう人間っぽいやつはあたしたちみたいな奴ら』

ジュリアもそう言いながら笑う。

『人形も複雑なのね』

いちごは部屋に飾られている人形を見回す。

『…私、人形が好き』

そう言ういちごを見て、3体は嬉しそうに微笑む。その顔は本当に幸せそうで、営業スマイルで飾られている人形も、どこか嬉しそうに見えた。

…ヤバイ…俺、人形キライになれねえ…っ！！

## 立場の弱い俺

最近うちの3バカには趣味があります。

『あ、もしもしい？ミス桃色？？』

いちごとの電話です。

『今何してるの？』

『ブログ更新よ、ジュリアちゃん』

机の上に立てた受話器に、3人で寄り添つて会話する。

『ねえ、ふと気になつたんですけど、桃色いちごって本名ですか？』

『ううん』

『本名は？』

『本名はね、…………よ』

あれ？沈黙が…？

「どうした？」

突如黙り込んだ3人に訊いた。3人は顔面蒼白で立ち尽くしている。  
俺はテレビを見ていて会話の内容はちゃんと聞いていなかつたので、  
よくわからない。

『…………いや、本名があまりにもダサくて…………』

リサがそう言った。

「何なの？本名」

『それは……いちごの名前に関わるから秘密だ』

あーそんなにダサイの…。だからつて桃色いちごも凄いネーミング  
だけど…。

『あ、みんな。私もそろそろ仕事に戻るわ』

『ああ、じや、またね』

3人は電話を終え、改めてソファーの方のテーブルにくつろいだ。

『ダサかつたわ』本名。焦るわ』

『あのルックスからは想像できないよね』

「うん」

ちょっと聞きたかつたなあ本名。

……暇だし、シリトリでもしねえ？』

『いいですよ。雅樹さんも参加してね』

おつ、しつとすんのか。まあいいよ。

ユ  
リ  
ア  
・  
俺。

『さあ、おまかせだよ。』

二〇四

『詩』

卷之三

『新編和漢書』

『ルシルン』今日は天氣がよくて気持ちいいですね!!

『好文網』

眠るが 眠かれぬ者

ラジオの翻訳

老象

『恨むなよ、仕方がなかつたんだ…』

「ハニウムショーハー！」

『段々寒くなつてきましたわね』

そうですか。

『猫の額ほどの広さのミスター茨木の家』  
つるさいわボケ！

まあそれから俺はこんな感じのじりとりに2時間ほど付き合い、へ

トヘトに疲れてしましました。アホに付き合つのは乐じやねえ。

## ピンポーン

あ、誰か来た。

『雅樹ちゃん』

魔女だ。

『開けて～。晩御飯食べに来たよ～』

俺は渋い顔でドアを開ける。

『そんな突然来ても飯は『こわい』ません』

『大丈夫よ。華夏美ちゃんに前もつてメールしてあるから』

『そう言いニッコリ笑うロリータ女は、スルリと家に入つて行つた。

『みんな遊びに來たあ～！』

『おう！こちーー！』

リビングの方から3人の黄色い声が聞こえる。俺は無言のまま玄関のドアを閉め、重い足取りで部屋に戻つた。

## ローラー服がいつぱいー

「パパあ？」

「ん？」

「いちじゅうちゃんのお家にはいつ連れていくつてくれるの？」

「……。」

「そんなこんなで俺はせっかくの休みを返上していちじゅう城へ来ています。可愛い我が子のためだ……。」

『夏樹ちゃん、飲み物は何がいい？』

いちじゅうがキッチンから俺たちがいるコンビングに呼びかける。

「ん~？」

夏樹は答えられないでソファーハイ座つたまま首を傾げている。

『おいで～』

夏樹はそう言われてキッチンへ走つて行つた。キッチンから楽しそうなふたりの声が聞こえる。

「うわ～いちじゅうちゃんの食器はみんなかわいいね！お鍋とかも全部かわいいし！」

『可愛いでしょ？ 可愛くなこやつは翻つてやつたわオホホホホ』

「へ～」

：真似するなよ？

『……あのね、これは緑茶、こっちはココア、それからコーヒー、冷蔵庫に牛乳、カルピス…あー私のオススメはね、私のオリジナルブレンドのお紅茶よー』

「それって甘い？」

『甘いっていうか…うーん…マカラクルな味よ』

「じゃあそれ！」

夏樹、お前意味わかつてねえだろ。

『雅樹ちゃんは～？』

「…緑茶で」

『ジジくさつ！』

じゃかあしいわ小娘！

しばらくするとふたりがキッチンから戻ってきた。夏樹が俺の前に花柄の湯呑みを置く。ふたりの手にはお揃いのウサギのマグカップ。

「夏樹、ひとくちだけちょうどだい」

「え？」

娘よ、わかれ。別に飲みたくないんだ。お前のために毒味をしてやるんだよ。

俺はエクセレントティーを口に運ぶ。

「！？」

『美味しいでしょ？』

「ああ…驚いた…ミラクルだな」

マジで美味しいんだけど！今までの人生で味わったことのないタイプの美味だ！

『初めから遠慮せずに飲んでみたらよかつたのに』

「すいません」

謝るしかねえな、こりや。美味しいわ…。

「いちごちゃん、何が入ってるの？」

『ふふふつ。秘密よ。私が死ぬときに夏樹ちゃんにレシピを遺言してあげるわね』

「ゆいご～ん？」

『そうそう。ま、そのうち意味わかるわよ。隠し味だけ教えてあげるとね…それは愛よ！オホホホホ！』

はいはい…。

『あ、夏樹ちゃん。この前言つてた人形の服、あげるわね』

いちごはそう言い席を立つた。そして2階へ上がって行った。10分くらい経つて、いちごは小振りなダンボール箱を持ってきた。俺たち親子は、テーブルの上に置かれたその箱の中を覗く。

「うわあーー！」

中にはロリータ服がてんこ盛り入っていた。夏樹の目が輝く。『型  
が古いし、何のブランドでもないお洋服なのよ。今はもう、流行の  
ものや、ブランドもの、限定品ばかり着せてるから』

あんな小説で何故そんなにド金持ち？！

「ありがとう！いちごちゃん大好き！」

『どういたしまして』

帰宅してから3時間、着せ替えじつじだったのは言つまでもない。

『雅樹！もつロリータはイヤだ！ー！』

『雅樹さん、田まぐるしく着替えさせ続けられるといいですね  
！』

『何着か、外人タイプのあたしには、ヒップが見えるくらい短いん  
だけど！』

各個人の悩みはそれぞれだな…。

17位――

皆様、わたくし作者は今、手が震えています。なぜならこの度『メティ』でのランディングが…

…「わあああああ――！」

皆さんこんにちは。雅樹です。しゃしゃり出でてきた作者はちやんと殴つておきました。女どうが関係ありません。作者が作品に出でくるなど、言語道断です。そもそもこの小説は俺のナレーターがあつてこそ成り立つ…

…「わあああああ――！」

『読者のみんな！リサです！ハゲは黙らせておきましたので』『安心下さいます』

「お前！鼻の穴は反則だつて前にも書つただろ？がー・お前の腕はほ  
細いから痛いんだよ！」

『わかつたから、早く鼻血を止めかしたら？その辺汚したら華夏美  
ちゃん悲しむぜ』

「違うんだー！俺は読者に伝えることが――！」

『「ひっせえー・マリンがちゃんとやつてくれるぞ。なあ？』』

『……皆さん、こんにちは。マリンです。この度、『メティ』のラン  
キングで17位にランクインされました。まだ連載を始めて1週間  
と経っていないのに、ここまで皆さん的支持が得られたことを大変  
幸せに思います。それにしてもこんな小説にお越し下さるなんて皆  
さん物好きですね…はつー今あたし失礼なこと言いましたか？すみ  
ません！…とにもかくにも、これからも頑張りますー。』

「俺がな…」

『は？頑張るのはあたしだぜ？』

『いいえ！頑張るのは私よ雅樹ちゃん！』

「お前どつから湧いてきた……？」

『うふふふ。私に不可能などないわっ…』

「いや…お前…玄関の鍵ぶつ壊してんじゃねえか！どうじてくれるんだよ…！」

『バカね、雅樹ちゃん。修理屋さんを呼べばいいじゃない』

「壊したのはお前だろ？！」

『もうつ。雅樹ちゃん。鼻血出しながら怒られても全然恐くないわよ？むしろおもしろいわオホホホホ！』

「…殺す…お前ら殺す…」

『…』ういう時に一番冷静でクールなのはあたしね。今の状況を説明するとね、ミスター茨木がミス桃色を追いかけ回し、リサは鼻の穴に突っ込んだ腕を洗つていて、マリンは蜜柑の背中に乗つてミスター茨木とミス桃色の大乱闘にアタフタしてるって感じね。そしてあたしは安全な食器棚の中から実況しております。せつかくめでたい報告だったのにめちゃめちゃね。オーマイガー』

「パパあ！蜜柑！ただいま！」

「…あなた！この部屋は何？！」

『華夏美ちゃん、『めんなさい。雅樹ちゃんが大暴れしてたのよ。』

「誰のせいだよ…！」

「あなた、とりあえず鼻血を何とかして！いちじきちゃんは部屋を片付けて！」

『え～！私が片付けるの？』

「誰であろうとあたしのうちを汚す奴は許さん！片付けなかつたら今後こはんは作つてあげません！」

『鬼だ～！』

「うして、17位になつたためでたい田は過ぎていつたのである…。

## **避暑地にて～その1～（前書き）**

避暑地に家族旅行！ ほのぼのまつたりリラックスな皆さんです。

## 避暑地にて～その1～

「あなた？」  
「ん？」

寝室のベッドの上で、隣に横たわる麗しき妻が俺に話しかけてきた。

「会社、連休取れないかしり」

「取れないこともないけど、どうして？」

「夏の思い出に、旅行なんぞつかと思つて」

「家族で？」

「そうよ。いちじりちゃんも一緒に

「…あいつ家族じゃないよ？」

「家族も同然よ。可愛いしこうじじゃないの」

えー…。

と、いうわけで俺たちは家族（？）旅行をすることにになりました。  
車で避暑地の山へ行きます。

『どうしよう！ 楽しそうぎるわ夏樹ちゃん！』

『こりゃやん、まだ車の中だよ。しかも高速道路だよ？』

『でも楽しいわ！ ありがとう、連れてきてくれて』

車の後部座席には、右から順に、チャイルドシートの夏樹、いちじ、  
何故かちゃんと3バカ。助手席には妻と、彼女に抱かれた蜜柑。

『雅樹、楽しいぜ』

『楽しいです』

『あたしも』

まあ、そんなに楽しんでくれてるなら、3バカが一緒でもいいや。

『雅樹ちゃん、どんなところに行くの?』

「山の中のロッジだよ。小さな村の集落みたいに、家族ごととかでコテージに泊まるんだ」

『じゃあ、至れり尽くせりのお料理が出たり、温泉の大浴場があつたりつていうタイプの旅行じゃないのね?』

「ああ。自然と戯れるタイプの旅行です」

『まあ!』

「川で遊んだり、夜は外でバーべキューだし、いくつかのコテージで集まつてキャンプファイヤーもあるし、早朝にはカブトムシとかを取りに行つたりね」

『楽しそうね!』

「だろ?」

『あたし、一応ジーパンとTシャツ持つて来たのよ。よかつたわ。こんなフリフリじゃ大変だものね』

あ、そういう服も持つてるんだ。

『でもおばあちゃんのなんだけど…サイズ大丈夫かしら』  
遺品かよ…!

…数時間後…

『着いたね～！涼しいね！そして山だね夏樹ちゃん！』

「山だね～！」

『どういう感想だよ。』

「さあ、荷物持つて降りるから手伝え」

『え～！もつちょっと都会の喧騒から遠のいた雰囲気を味わおう

！』

…働く者、食うべからず

『何を運べばいいんですか？』

俺たちは豊かな森の中に佇むむちいさなログハウスへの玄関前へ、車から荷物を運んでいく。

「あ、見て。いちごちゃん、あそこに可愛い鳥がいるっ！」

夏樹が木の上を指して言つ。

『まあホントね。夏樹ちゃんは焼き鳥好き?』

…え。

「あなた～、あたしは本部にチエックインして鍵を貰つてくるわ～」

「ありがとう」

華夏美はそう言つて走り去つた。その後ろ姿はまだまだイケてるぜ、  
華夏美よ。

俺たちはそれから夕刻前までそれそれでくつろいだ。

俺は蚊取り線香を焚いたラウンジで読書をしていた。俺の座る木製のリクライニングチェアの隣で、蜜柑も寝息を立てていた。蜜柑に寄り添うようにして3人も羽を伸ばす。都会よりもかなり涼しいし、自然の音が心地いい。

華夏美は、着替えたいちごと夏樹を連れて、近くの小川へ散策に行つた。そう言えば、いちごの育ての親のおばあちゃん、若い頃スタイルよかつたのだ。

『いいな～。こんな所に住みたえな～』

『あたしも。前世のモデル業もずっと都會暮らしだったしね』

『あたし、幸せです』

楽しそうだなあ。

『もう少ししたらバーベキューの準備に取りかかって、その後はキャンプファイヤーの集合場所に行つて、カブトムシの罠を仕掛けに行つて…』

『おお、楽しい企画が盛りだくさんだな～!』

『雅樹さん、寝ますね』

『ハゲ、ずっと運転してきたしなあ』

『ミス茨木が帰つてくるまでそつとしておきましょう』

**避暑地にて～その1～（後書き）**

次回に続きます

**避暑地にて～その2～（繪書も）**

前回の続きをです

## 避暑地にて～その2～

「夏樹、いっぱい食べなさい」

華夏美が夏樹にそう言つた。俺たちは今、バーベキュー場でバーベキューをしています。蜜柑はお留守番。

「うん、いっぱい食べる～」

俺たちの他にも、バーベキュー場にはたくさんの家族やグループがいた。早くも出来上がりしている人もいる。

「あー！」

突然、夏樹が声を上げた。

「どうした？」

「杏ちゃんだ！」

夏樹はそう言つと、箸と皿を持ったまま走り出した。「こらー 置いて行きなさい」

「やうよー 肉を返してー！」

…華夏美さん、何か違います。

少し待つていると、とある家族がこちらに近づいてきた。

「こんばんはー！ こんなところで会つなんてー！」

「あら、岡本さんー！」

「知り合い？」

「ええ。夏樹のお友達のご家族よ」

子供の顔を見て思い出した。何度かうちに遊びにきたことがある。

「いつも夏樹がお世話になつております」

「あり、夏樹ちゃんのお父さん？ うちの旦那より男前ねー！」

「…どうも

奥さん… 旦那さん横で田を潤しますよ？

「ところで茨木さん、そちらのお嬢さんは？」

岡本夫人が俺に尋ねた。

「友人です」

『桃色いちご』です』

「まあ！！」

その名前を聞いて岡本夫妻は絶句。

『握手してちょうどだい！　ロリータじゃないからわからなかつたわ！』

『こういう場ではああいうお洋服は不向きかな～って』  
『あれ？なんか周囲がさつきよりザワザワしてきた？　しかもやたら俺たち家族の方見てる…？』

「…桃色いちご？」

「マジかよ！」

「え！　どこどこへ？」

あ…そつか。こいつ何気には名人なんだつた…。忘れてたよ。

『雅樹ちゃん…私、部屋に戻つた方がいいかしら？』

「いや、いいんじやないか？　気にすんなよ」

俺たちは何食わぬ顔でバーベキューを再開した。

「じゃ、私たちも戻るわ。またキャンプファイヤーで会いましょうね」

岡本一家も自分たちの場所のバーベキューへ戻つて行つた。その後もしばらくはザワザワや視線は感じたが、みんなプライベートだから氣を遣つてか、俺たちに寄つてくることはなかつた。

「パパあ、いちごちゃんは凄い人なの？」

「まあね」

「ふうん」

俺たちは協力して後片付けをしてキャンプファイヤーの場所に移動

した。櫓を囲んで既に大きな円ができ始めていた。俺たちも輪の中に入れてもらう。するとこここのオーナーが来て、櫓に火をつけた。段々炎が大きくなる。

「凄いね～っ！」

夏樹の目はキラキラ輝いている。

『ミラクルね～』

おお、いちごも楽しそうだな。

『みなさん！ 今からビンゴ大会をやります！ カードを配ります！』

オーナーがビンゴを配り始めた。

『商品は、オオクワガタの幼虫、ペア温泉宿泊券、ワイン、などなど！ 頑張つて下さい！』

『やるぜ～雅樹ちゃん！ 燃えるわねっ！』

そうですか。

『では最初は～… 62！ 62です！』

ビンゴは楽しく進んでいった。

「あっ！ 見て～あたしリーチ！」

華夏美に手伝つてもらいながらの夏樹がリーチになつたらしい。

『ふふふふふ。私はダブルリーチよ、夏樹ちゃん』

『次の数字は… 8！』

『あのハゲー！ トリプルリーチになつただけじゃん！』

『いちご！ オーナーまだハゲてないよ！』

『次35じゃなかつたら殺すわ！』

『えつ！』

夏樹、きつと冗談だから大丈夫だよ。

『次は… 38！』

『きょえええええ！』

…ヤバい！ 目がイツてる…！

そんなこんなで俺たちは何の商品もゲットできずに終わりました。

それから俺たちは部屋への帰り道に、カブトムシの蜜を仕掛けで帰った。

俺たちは元気に昨夜の仕掛けに向かいました。  
「…あ！」  
夏樹がカブトムシを発見した。  
『雅樹ちゃん！ バツチリだわ！』  
仕掛けには大きなオスのカブトムシが掛かっている。  
『どんな味なの？！』  
…食べないよ？

「パパあ、おつきいね～」

俺は目をキラキラさせている夏樹に、カブトムシを取つて見せた。  
「あたしも触る～！」  
『私も握る～！』  
…やめて下さい。

俺たちの夏の休日は、そうして幕を閉じました。

ちなみに、余談ですが、帰りの車の中は、俺と人形以外、全員爆睡でした…。

（翌朝）

『……と、まあ。やつこりコンセプトでこいつに頼つてゐるわがなのよ  
「なるほど」

俺は今日は仕事としていちじ城に来ています。ちなみに、こいつには  
時は毎回3バカも一緒にです。

### ピンポーン

あら、来客です。いちじがモニターを見ながら受話器を取る。

『おはよ～。入って入って～』

いちじがそう言つと客が玄関のドアを開ける音が聞こえた。そして  
数歩の足跡の後、メガネをかけた痩せた男が姿を現した。ガリ勉つ  
て感じの見た目で……いや、オタクつて感じかも……。

『雅樹ちゃん、紹介するね。轟毛呂ちゃんよ』

「……はあ

「ど、どどどど！　僕、あの……えーっと……お会いできて光榮  
です！」

拳動不審かよ！

『いちじ、まさか彼氏かよ？』

『いやだわ、リサちゃん。だったら雅樹ちゃん妬いてくれるかしら  
？　ふふふ』

アホか…。

「あ、もしかして、MASAKIちゃんですか？　ブログによく登  
場しますよね」

「ああ、まあ」

つてかなんで俺、ブログではローマ字表記なの？

「確かに整つた顔してますね～」

「……どうも」

……。

『つむか何なんですか？　巻き戻つて』

『ああ、ハンドルネームだよマリンちゃん。私のブログに度々コメントしてくれてるファンだったんだけどね、私のリサーチにより近所に住んでることが判明してさ、パシリに使用してるのよ』

『そういうことなんですよ。あははは』

……ふーん。

『で、今田のお使いはこれね。お願ひね』

『いや、これはもう言つて巻き戻しにメモを渡した。』

「行つてきまーす」

そう言つて巻き戻しに、『いや、これはヒラヒラと手を振つた。』

『さて、仕事の話の続きよ』

「……ああいうパシリつてまだいるの？」

『うん。みんな交代で私の面倒見てくれるからね。女王蜂ちゃんとかおたまじやくしちゃんとかコーラシア大陸りゅせんとか、色々ね』

『いいな～。あたしもパシリ欲しいな～』

『おい、リサ。お前既に結構俺をパシリつてるぜ？』

『あたしがまだ女頭だった頃は、数えきれんほどどのパシリがいたんだけどなあ』

じゃかあしいわロリータ女。

『あたしもモテルだつた頃は、あらゆるメンズにアプローチされて楽しかつたなあ』

モテたんですね、ジュリアちゃん。

『でもね、安心してよ、雅樹ちゃん。私が愛しているのは雅樹ちゃんだけよつ』

は？

『そひ、仕事仕事～』

……。

『いや、ちゃんと読みませ～』

マコンがこちるのパソコンへ近づく。

いわよ

「新作ですか？」

『ええ。体中がゴムのような主人公と、足技の得意なコックさん、剣道の達人、天才航海士、オトボケ技術士、などの面白いメンバーで海を旅する話よ』

待て！ 僕なんか心当たじか……！」

おもしろいですね！

主人公のネームは何でいいのか

寺て――――

『実はる、孰

『実はね、執筆中から「口ゲでは大盛り上がりなのよ！」またまた、ベストセラー間違いナシだわ！　オホホホホ！』

ブルルルル

あ  
電話だれ

いたこか電話へ走って行く

『はい、どなた？』　ああ、女王蜂ちゃん！　ふうん、そりゃな  
の。大変ねえ……まさかあの温厚な弟がねえ……キレる子どもたち  
？　あら～大変ねえ……。うん。うん。いいわよ？　いらっしゃ  
いな。　ああ、エクセレントティ？　ちゃんとあるわよ～』  
えー……また変なキャラクター増えるんだよねー……憂鬱だよ部長……。  
『え！　実はもう家の前にいる？！　入つてらっしゃいな～』  
玄関の開く音がして、その後駆け込んでくる足音がした。

卷之三

まあまあ。大変ねえ。今お茶淹れるわ。座ってて。

駆け込んで来たのは、20代前半であろう女性。真っ黒のライダー  
スーツに身を包み、黒髪を前髪を作らずにお団子にしている。長い  
手足にびっくりするような美人。手にはセンスのいいヘルメットが

握られている。

「あの… こんにちは、出版社の『MASAKIちゃん』でしょ？ 知ってるわ」

そう言いながら彼女は鼻をすすつた。

「あの… あんまり泣かないで下さい。まあ、とりあえず座つて下さい」

「ありがと」

俺は彼女を向かい側のソファの一間に座らせた。いちごがお茶を運んできて彼女の隣に座る。

『女王蜂ちゃん、弟さん、どうしてキレたの？ 高校生でしたっけ』  
「そうよ。部屋に入つてね、タンスの中身をチェックしたらね、アンダーウェアはボクサーパンツ派だったのよ。でも、その趣味が悪かつたから、全部破棄して新しいのにしてあげたのよ」

『どんなのに？』

『全部ハート柄に』

この美人、ニアホだ。そりやあキレますよ弟さん。

『ひどい弟ねえ』

『でしょ？』

いえ、彼は普通です。

『しかも、何故か両親にも呆れた顔をされたわ。ショックよ』

『理解のない親御さんねえ』

いえ、両親も普通です。

『あ、雅樹ちゃん、紹介が遅れたわね。彼女、ハンドルネーム女王蜂ちゃん。バイクが趣味だから、移動手段として呼びつける子なのがこの人あんたより年上だぞ。』

『いちごちゃんを後ろに乗せて運転するとね、いい匂いがするし、太ももにチラチラ当たる服のレースが最高なのよ』  
変態か！』

『まあ、ね。とりあえずさ、気晴らしに今日は雅樹ちゃんのお家でサーロインステーキでも食べましょ？』

「はい、そうですね  
話をまとめるな！このエンゲル係数泥棒猫が！」

## 海水浴

『ねえ、雅樹ちゃん。今の季節、行くべやといひがあるわ』  
我が家でサー・ロインステーキを頬張るいひが言った。

「却下」

『連れて行つてよー』

「いちじちゃん、どこのの?』

華夏美、余計な助け舟を出すな。

『海水浴よー』

……絶対夏樹が反応するぜ……。

『ママ! 行こうー!』

ああ…決まつちやつたな……。

……と、いつわけで。俺たちは海水浴に来ています。メンバー? 凄  
いぜ。意味わかんねえぜ。俺・華夏美・夏樹・いひ・女王蜂・3  
バカ・巻き貝。……うわあ。

「あなた、まだまだいい体ね」

華夏美…ありがとう。華夏美はピンク地の花柄模様のビキニです。  
白い肌に、色素の薄い茶色がかつた髪…君もまだまだイケるぜ…な  
んてノロケてみました。

『女王蜂ちゃん、日焼け止め塗つて~』

「うふふつ、いよ

変態つ!!

『優しくしてね』

「うふふふふふふつ

教育上よくねえからやめろ!!

「俺、日に焼けると真っ赤になつて皮剥けて終わるんすよね…

男としてなかなか悲しいなあ、巻き貝よ。

「パパあ、早く浮き輪やつて~」

「はいはい」

夏樹は、淡いピンクのワンピース型の水着を来てます。腰のあたりにミニスカートみたいなプリーツがついています。

『あ、雅樹ちゃん。ついでに私の浮き輪もお願いします』

「えー…」

『いいじゃんか!』

いちごは、白地にいちご柄のビキニ。ほとんどのパーツの縁にフリルがついている乙女仕様。

「あたしがやつてあげるつでば」

『ありがとう！ 好きよ女王蜂ちゃん…』

女王蜂は、無地の黒のビキニ。抜けるような白い肌に抜群のスタイル。綺麗な顔にお団子頭。男が群がりそうなのに…いちご大好きだなアンタ……。

ちなみに、3バカも色違いの無地のビキニ着用です。リサが白、マリンが水色、ジュリアが赤。やっぱリジュリアが一番スタイルいいね。小麦色の肌だし、海が似合つよ。うん。

「…まあ、浮き輪もできたし、行こうつか！」

「つひやあ！」

俺たちは走って海にザブザブ入つて行つた。……ヤベエ… 28歳サラリーマン、ちょっと楽しんでます。

華夏美は夏樹について浅瀬で遊ぶ。俺は…

『みんな、あの浮き今まで競争よ…』

といついちごに駆り出されました。浮きはまあまあ遠いけど、俺、正直、負ける気がしねえし。

第一コース、いちご。

第二コース、俺。

第三コース、女王蜂。

第四コース、巻き貝。

『ナニヤ...』

俺、やはり先頭に。 次に僅差で巻き貝がつぐ。 それに並ぶように女

から頑張れよ。しばらくその位置で接戦が行われる。

え?  
今背後で変な声が…?  
振り返ると巻き貝がいなくて、替わ

いやあ、意味わかんねえ——！！！

卷之三

「わあ、一ノ瀬ちゃん、もう行かなくていいんだ？」

『うへへー！ やつたあー一番だあー。』

…なんとか浜辺に辿り着けた俺と巻き貝は、海水でし�ょっぱくなつた口の中で呪いの言葉を呴いていた。肩でザンザン息をしてくると、ふたりが爽やかな笑顔で戻ってきた。

『私が一番よ!』

殺す  
……つ！

「俺、ちよつとバテた：休憩するわ」

『オッサンだねえ。女王蜂ちゃんと巻き虫ちゃんはまだ遊ぶよねえ

?

「喜んで！」  
「もちろんよ！」

「喜んで！」

俺は若い奴らを置いてパラソルの下へ戻った。

『よつ、楽しそうじやねえか』

「まあな…」

『あたしたちはあんまり塩水よくないから海水浴はアリだからね。まあ水が基本的によくないからね』

「だろうな」

『帰りの車、毎度の如く、あたしたちと運転手以外みんな寝ちゃうんでしようね』

「…だろうな」

俺は爆睡するみんなの顔を思い浮かべて微笑んだ。

『ミスター茨木、なかなかハッピーそうじやないの』

「そう?..」

『ああ』

『幸せそうですよ』

「そうか」

俺たちは笑い合つた。…までは覚えてるが、どうせり俺は寝てしまつていたらしい。

「…あなた? 海の家で」ほんはぢっ、まだ寝る?..」

「…ああ…いや、行くよ」

『連れて行けよ』

俺は3バカを持つて華夏美の後に続いた。

『私はジャイアント・スペシャル・ブルーハワイね

「それ、『ほんじやなくてかき氷だよ?』

『わかつてゐわよ夏樹ちゃん。お気になさりや〜』

『じゃあ、あたしはカレーにしようかな

『じゃあ、僕も華夏美さんと同じで』

『俺は枝豆ビールと冷や奴』

『夏樹はねえ、うび〜ん』

「あたしはラーメンで、大盛りで」

俺たちはそれぞれ食事をした。すると離れた席にいた金髪の男が声をかけてきた。

「茨木さん！」

「…おお！ アンソニーじゃないか！ こっち来いよ～」

俺の会社のすぐ下の後輩だ。血はアメリカ人だが、生まれも育ちも日本だ。でも英語は流暢だ。

「誰と来てるんだ？」

「弟のジョージと」

「…男ふたりで？」

「兄弟揃つて彼女いないんですよ…」うう

「そうかそうか。一緒にどうだ？」

「いいんですか？」

「ああ」俺たちの席にアンソニーとジョージが加わった。  
「いや～先輩。美女ばかりですねえ」

美女…まあ美女は3名ほどいるはずだが…変な奴だぜ？

「先輩、紹介して下さいよ」

「ああ。妻の華夏美、娘の夏樹、俺が担当させられた作家の桃色いちご」、その連れである巻き貝と女王蜂だ」

「…先輩、失礼つすけど、後半の方名前おかしくないっすか？」

『私は気にしないで。本名は永久に秘密よ』

「あたし、本名はね、琴美なの」

「僕は太郎です」

巻き貝、親、名前のセンスなかつたのか…？

「コトハ… ポツ」

あれ？ 誰か何か呟いたか？

「…ジョージ！ しつかりしろお！ どうした、熱中症か？」

アンソニーが、ジョージの顔色が異様に赤くて、目もぼんやり」と

に気がついた。

「琴美ちゃん、キレイ」

…あちやー…。

「お前、彼女タイプなのかあー？」  
アンソニーが肘でつついて茶化す。女王蜂はとこうと…不適な笑みを…何をたくさんでる？

「今度、あたしとバイクで出掛けませんか？」

「いいんですか？」

「バイクの免許はお持ちのようね。…負けないわよ」

何にだよ。

「望むところだ」

勝手に頑張れ。

俺たちはそれから意氣投合して、料理を追加してしばりく海の家に居座つた。

「ママあー…あたし眠い…」

人形を握り締める夏樹が華夏美にすがりついてきた。

「あらあら…どうしましようか」

『夏樹ちゃん、ビーチバレーとかしないの？』

4歳の娘に無茶を言つた。

「いちご、今日は連れてきてもうつて楽しかったし、また来ればいいじゃないの。ね？」

『そうね。実はまだ仕事あるしね…』

それから俺たちは外人と別れ、パラソルとかを片付けた。既に意識の飛びかけた夏樹も、半ば無理矢理真水のシャワーをさせて服を着せた。

帰りの夕日に照らされた車内は、案の定みんな爆睡。

『楽しかったですね』

『泳いでないけど、海の家でずっと夏樹に握られてたから結局塩水とか砂はついたな』

『ミスター茨木に洗つてもらえばいいでしょ』

『そうだな』

えー…俺、帰つてもまだやることあるんだ…。

## 甘い災難

俺はいつものように会社に出勤した。当たり前のように入社ヘルドでアロハで室内サングラスのおっさん（部長）もこるし、もみ上げを撫でるアンソニーも、同僚の佐藤もいる。

「先輩、グッモーン…」

「おはようアンソニー。今日は機嫌が良さそうじゃないか」

「わかりますう？ 実は、我が弟がデートに行ってるんですよ」「へえー。彼女できたんだな」

「いえ、琴美ちゃんと」

えーーー！

「朝からバイク飛ばしていきましたよー」

「お前、27だろ？ 弟は？」

「25つす」

「仕事は？」

「英語の講師だけど、仕事そつちのけですよ」

「マジで…」

「あれほどのストライクゾーンはこれまで会ったことがない感じです」

「ふーん…」

張り切りすぎて事故らなきやいいけどなあ…。

昼過ぎ。

昼休みも終わり、俺は相変わらず仕事をしていた。そこへ、隣の席のアンソニーに電話が入る。

「はい、お電話変わりました。…ええ、ジョージは私の弟ですが…はい…ええ…え？！ そりゃ今すぐ行きます…はい…はい…はい、失礼しますっ」

急いで電話を切るアンソニー。

「どうした？」

「ジョージが事故りました！..」

「は？！」

「部長！俺、ちょっとかなり急用です！すみません！」

「ちょっとわけありなので俺もついていきます！」

「？？？」

スキンヘッドはきょとんとした顔をこちらに向け、わけのわからぬまま手を振ってくれた。

『×病院』

俺たち2人は受付で部屋を聞いて病室へと急いだ。

「ジョージ？！」

アンソニーが病室のドアを勢いよく開けると、中に脚を吊られたジョージがいた。

「やあ兄さん」

「やあ…じゃねえよ！何やつてんだよ！」

「怪我は脚だけだよ。あとはすりむいただけだし。あ、琴美ちゃんへの心の病なら…つぶつ

「どアホ！！」

「まあまあ落ち着けアンソニー」

「はっ！あの女は？」

アンソニーが病室を見回すと、隅の方に隠れているライダースーツの女王蜂がいた。

アンソニーは彼女を睨む。その表情を見てジョージが言った。

「兄さん、彼女は何も悪くないんだよ。自分のせいなんだ」

「…どういう意味？」

俺は女王蜂を椅子に座らせ、自分もその隣に腰掛けてふたりの会話を聞いた。

「俺たち、ふたり並んで自然の中を駆け抜けてたんだ。で、とある直線の道で、彼女がヘルメット開けてこっちに微笑みかけてくれたんだ。緑の中で、彼女の表情は輝いていて、…気付いたらいつの間にか直線の終わりで、びっくりしてハンドルを切つたら…ね

「アホだな」

俺は一部始終を黙つて聞いていたが、彼、アホだな。

「彼、よくあたしについてこれるなーってさ。上手いなーって。で、景色めちゃめちゃ気持ちいいし、ちょっとコンタクト取ろうとしただけよ。彼にウインクしながら、一瞬親指を立てて最高だねっていう意味を示しただけ」

「…うちのバカがアホなだけだな、そりゃ」

「ごめんなさい、アンソニーさん」

「いやいや。気にすんなって。」じらじらと睨んでごめん。こいつ、琴美ちゃん大好きみたいだから見舞い来てやつてよ

「うん」

解決したか。よかつたよかつた。脚をギブスでガツチリ固められて吊られてるジョージもイヤな気はしていないみたいだ。むしろ愛は深まつたとか？　あー、俺、なんか無駄に疲れた…？

『あー！ 雅樹ちゃんがいるっ！』

いちごが病室に入ってきた。相変わらずのロリー・タフ・アッシュ・ションに、クルクルに巻いた黒髪をふたつに結っている。手には深紅のバラの花束。それ、見舞いには間違つてないかなあ…。

『うほ～ 片足ミニイラカ～…ダサつ…！』

「がーん」

「落ち込むな弟よ。プラス思考で行け。怪我のおかげで美女が自分を訪ねてくれるわけだからさ」

「そうか！」

「立ち直り早いなあ オイ！ 陽気なアメリカ人兄弟だな！」

『あ、女王蜂ちゃん。ここまでタクシーで来たから、帰りお家まで

『送つてね』

「了解」

ん  
：俺、場違いじゃねえ？

## ボス來たる

「あなたは、罪を認めないと呟つのだね？」

「だから俺は何もしていないんだって」

「ならばあなたは、あの現場で誰と話していたのだね？」

「だから、人形と」

「またその虚言か！ 精神鑑定にかけるか？ ああ？」

「異議あり！ 裁判長！ 檢察官は被告人の人格そのものを否定しています！」

「裁判長！ これは重要なことなのです！」

「…では、検察官、続けて下さい」

…ガバッ！！

俺が何をした―――？

あ…夢か…。

「あなた～～ごはんよ～～。起きて～」

ああ、いつもの朝だ。よかつた。俺は寝室を出て顔を洗い、リビングへ行く。

「…あれっ？」

『おはよう、雅樹ちゃん。お目覚めはいかが？ 今日も素晴らしい天気よ』

「いち～」…

「たまたま通りがかつたんですねって」

「…いつ？」

『朝の4時過ぎに。で、ついでだから朝ご飯をいただいて帰ろうつかと思って、近くの公園で時間を潰したりしてたの』

「何やつてたんだよ、4時に

『散歩』

「深夜に？」

『あら、雅樹ちゃん。心配してくれるのね。夜の散歩は涼しいし人通りも少ないから自由よ。それに安心して、あたし実は黒帯の段持ちだから。試しに朝の一勝負いかが？』

「拒否します」

俺は若干イラつきながら席に着く。なんで朝からロリータに会わなきゃいけないんだよ。

『あ、でね、まあ色々わけがありまして、今日雅樹ちゃんにひつついで出勤するから~。ついでに人形も持つて行くから~』

「はあ？！」「

『しつこく質問すると、シバき回すからね雅樹ちゃん』

…という悲惨な朝、俺はいちごを連れて出勤している…。通勤ラッシュの人混みでは迷子になりそうとか言うから、いちごと左手で手を繋ぐ。いちごの左手には3バカ。…ってかなんで交通費俺持ちなんだよ…！

何やかんやで無事に会社に到着。通勤中、周りからの視線が痛かつた…。もう少しの辛抱だ…会社に入れば…嗚呼、駄目か…やつぱりジロジロ見られるのね…。

「おはようございます、先輩。おやおや、可愛いのん連れて！」

アンソニーにそう言われていちごはまんざらでもない顔をしている。「おお茨木、奥さんと子供いるのにそんなに若い子と…？ 手なんか繋いじゃつて～

この手には深い理由があるんつすよ…。

俺は自分の席に着く。いちごは部長の所に行つた。

『部長さん』

「お、桃色先生~。新作の売れ行き、なかなか好調だよん」  
スキニーヘッズ・サングラス・アロハとロリータ女…ここ、まともな会社なの？

『本当？ よかつたわ～。今日はね、雅樹ちゃんとたまたま会ったから挨拶しに来たの』

何がたまたまだよ。

「そつかそつか～」

『今日は雅樹ちゃんと仕事の打ち合わせあるから、10時になつたら一緒にここを出て帰りますう～』

「ああそう。まあじゃあ自由にしてよ」

部長、この女を泳がしておいてはいけません！

『ああ、はい。じゃあ適当に探検してきます』

神聖な社内をうるつかないでくれっ！

「はいは～い」

許可すんな！

『雅樹ちゃん、お金』

部長のところからスキップで戻ってきたのが『は、俺にそう言つた。

「は？ 知らねえよ」

『意地悪つ！ いいのよ～！』で オタクなのをバラしてやるー。

『何つすか？ 聞きたい聞きたい！』

『あのね～アンソニーちゃん。雅樹ちゃんつたらね～

「いくらだ？」

『ありがとう雅樹ちゃんつ』

俺はいちごに小遣いをやり（なんであいつ無一文なんだよアホ）、仕事にかかりた。

『何ともまあ広いしきれいな会社ね～。儲かってるのね、この会社』  
『これって広えの？ あたし就職したことねえからわからんねえわ』  
社内を探検するいちご・人形たちは話しながらあたりを見回していた。

『リサさん、凄く立派な会社ですよ～！』

『あたしの元カレ、こうこう会社の社長だったなあ。ま、あたしは

遊びの愛人だつたけど

『ジユリアさん、色々あるのねえ』

『モデル時代は本当にモテたんだつて〜』

『つてかさ〜、どこ行こつか〜』

いちごはキヨロキヨロしながら歩く。彼女とすれ違う度に多くの社員がびっくりしたような顔をしている。

『社長室なんてどうだ？　ハゲたおっさんが黒皮の椅子でふんぞり返つてるとこ見よっぜ』

『リサさん…社長さんハゲてるかどうかわからないでしょ〜…』

『安心しろ。多分ハゲてるつて〜』

『じゃ、決まり！　社長室にレッツゴー！』

いちごはスキップでエレベーターホールに向かう。

『すみません。社長室は何階ですかあ？』

いちごはエレベーターを待つ2人連れの女子社員に訊いた。

「…は？」

尋ねられた若い女子社員は目を丸くしている。

『だ〜か〜ら〜。社長室つ〜』

「なんでこんなところに桃色いちごがいるのかしら？」

「知らないわよ。…どうする？」

女子社員たちは小声で会話する。背の低いいちごはそんな2人を見上げて返事を待っている。

「…社長室なら…8階に…」

『あつや。ありがと』

いちごはちょうど来たエレベーターにするりと乗り込んだ。女子社員2人はその様子をポカーンと見ていた。

チーン

8階に到着。

『社長室つてどこだと思つ？』

『さあ……また誰かに訊けば?』

『そうね。……すみません、ちょっとといいでですか?』

ちょうど通りがかった中年のオジサンに声をかけた。バーコード頭に膨らんだ腹、いちじょり少し高いだけの身長。

「はい……つてもしかして桃色いちじょ?」

中年のオジサンはいちごにそう言った。

『はい、そうですけど。私って結構有名人なんだなあ』

「僕も娘も妻もみんなあなたのファンだよ。本当に普段からロコ一夕なんだね」

『ええ……あ、そういう。お尋ねしたいことがあるんですけど、社長室はどこですか?』

「社長に用?」

『用つていうか……暇つぶしです』

「暇つぶし?」

『そう』

「あはははは～やつぱり君つて面白い子だね。実は僕が社長なんだよ」

『え!…』

「お茶でも出すよ。社長室へどうぞ」

『どうも～』

2人は社長室に入つて行つた。

『いつもお世話になつてます。新作も着々と部数を伸ばしてゐた

い』

「君の小説は全くわけがわからなくておもしろいよ～

『ありがとうございます～』

そこへ秘書がお茶を運んできた。

『ありがとうございます。いたします』

「あ、そうだ。なんでまた社内見学?」

『担当の茨木雅樹ちゃんにひつついて來たの。雅樹ちゃんとは家族ぐるみで仲良しで、旅行も連れて行ってくれたし、この前も海水浴

行つたりしたの』

「そうかそうか。茨木か。また今度コンタクトを取つてみよ」

『あ、よかつたら今夜一緒に雅樹ちゃんのおうちの晩御飯に転がり込みましょう!』

「いいの?』

『私はいつも勝手に転がり込んでます』

「ほ~う』

……そんなこんなで午前10時。

『雅樹ちゃん、おうち帰るよ~ん』

「はいはい』

俺たちは電車でいちじの家へ行つた。今日は本当に無駄な交通費や金を遣わされる……。

俺たちはいちじの家で仕事の話を済ませた。今日やけに仕事の話に集中しているな。

『雅樹ちゃん、今日晩御飯食べに行くから。華夏美ちゃんにはもうメールしたから』

ああ、素直に仕事に集中した理由がわかつた。俺は気重のまま社へ戻つた。

やつと退社時刻になり、帰宅の途につく。

「ただいま』

俺が玄関を開けると、駆け寄つてくる二人。

「パパ~お帰り』

『雅樹ちゃんお帰り』

悲しいかなこのパターンにも最近慣れてきたわ……。

「茨木』

あれ?奥の方から聞き慣れないオッサンの声が……。

「あなた～社長さんよ～

妻…今何て言つた？！

俺は慌てて靴を脱ぎリビングへ走り込む。

「……はっ？！」

社長が…社長いるのは何故ですかあああ――――――――――――――

「茨木君、いちじちやんと一緒に伺つたよ。まさか君がこんなに彼女と親しいなんて。実はファンなんだよ」

「……はあ」

社長が我が家でき焼きを囲んでいる…バー「コードから覗く地肌が鍋の熱氣で赤らんでいる…」こけいとこサガニヤニヤしている…何コレ。

「さあ、早く座りたまえ。すき焼きだぞ？」

「……はあ」

なあ…部長…俺もつイヤ…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8414a/>

---

俺のリサちゃん！

2010年11月14日09時32分発行